



『文学碑』をたずねて その2

『数々の 人が残せし 古の 碑たずね 我は行くなり。』今回も前回に引き続き文学碑を取り上げ、地域別にいくつかを紹介していきたいと思う。

1 砥堀・水上・城北地域

松尾芭蕉句碑（姫路市南八代 喫茶店「木曾」跡）
芭蕉の俳諧七部集の一つである「曠野」所収の句碑。
『送られつ 送りつ果ては 木曾の秋 芭蕉』



松尾芭蕉句碑

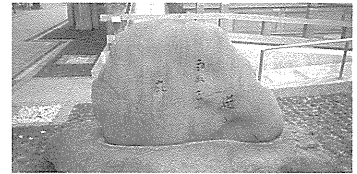


梶子節句碑

2 旧姫路地域・姫路城跡

梶子節句碑（姫路市坂田町 妙行寺境内）
昭和20年の空襲で被災し、昭和21年か22年頃再建を記念して建立した。
『十方に 光被す菫 秋高し 子節』

五十嵐播水句碑（姫路市総社本町 播磨国総社境内）
昭和33年4月27日播水が主宰した「姫路九年母会」が建立した。
『逆る 雨水花の 庇より 播水』



五十嵐播水句碑

大塚徹詩碑（同上）
詩・短歌・民謡・校歌などの作者として活躍し、民謡雑誌「猿」^{ぼく}「北海の蟹」^{かに}などを著した大塚徹の詩碑。碑文は昭和4年西条八十主宰の詩誌「愛誦」^{あいしよ}に応募、特選に入選した「北海の蟹」の第1節。
昭和38年1月20日に鳳真治の設計、藤原露眠の書、尾上明治の彫刻で建立された。

『陽に興じては
花粉のごとく風にながれ
鳥のごとく巣にかえる
あわれ友よ
今日もまた旅をゆくか』



大塚徹詩碑

北海の蟹より 徹

宮本百合子文学碑（姫路市岡町 城の西公民館横）
「貧しき人々の群」「伸子」「風知草」「二つの庭」「播州平野」などの作者宮本百合子の文学碑。

左『宮本百合子「播州平野」から抑揚の野 姫路市長戸谷松司書』

右『宮本百合子文学碑』

日本が未曾有の混乱に見舞われた敗戦を鮮烈に描いた名作「播州平野」は、姫路の小さな“しもたや”から生まれた。ここから東約二十mにあった「まつや」に泊まった女流作家宮本百合子は、瓦礫の中に立つ姫路城、町の人々のうちに、輝く明るさを見つける。「播州の平野には独特の抑揚があった」と表現したのである。この文学碑は「まつや」が老朽によって取り壊されたおり名作をしのんで建てられた』



宮本百合子文学碑(左)

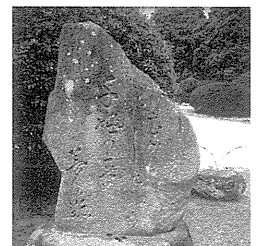


宮本百合子文学碑(右)

梶子節句碑（姫路市本町 姫路城西の丸）

昭和8年3月姫路市主催「城を詠める俳句展覧会」の開催を記念して梶子節主宰「白鷺会」が建立した。

『千姫の 春やむかしの 夢の跡 子節』



梶子節句碑

姫山公園内句碑（姫路市本町 姫路城姫山公園）

『あらためて 天の下照る はつ日哉 桃季謹詠』

大正5年の建立。

有本芳水・三木露風詩碑（姫路市本町 シロトピア公園内）

姫路市飾磨区玉地出身で詩集「芳水詩集」「旅人」「ふる郷」などを残した有本芳水と、たつの市出身で詩集「廃園」「白き手の獵人」「寂しき曙」「童謡赤とんぼ」などの作者である三木露風との合作「白鷺城回想の賦」の詩碑。碑文は第1節（露風作）、第2節（芳水作）と最後一行。この詩は20節と最後の一行からなる詩で、裏には詩全文と二人の略歴が紹介されている。

平成3年3月27日姫路市文化振興財団が建立した。

『白鷺城回想の賦』 有本芳水
三木露風

清らかに澄める蒼穹に 相生の松原東して
偉なる姿を仰ぐとて 渚路走る旅人が ああ永久に絶ゆるなき
白鷺の城よ永遠の 白き姿を返り見て
故国を偲ぶ郡ごころ 母の胸をや偲ぶらむ 後藤 茂書』

阿部知二文学碑（姫路市小利木町 清水橋袂）

姫路市坊主町に在住し、「日独対抗競技」「冬の宿」「黒い影」「おぼろ夜」「人工庭園」「煙雨」「城一田舎からの手紙一」などを残した阿部知二の「城一田舎からの手紙一」の文学碑。裏には、阿部知二の略歴が紹介されている。平成3年3月27日姫路文学館建設を記念して、有本芳水・三木露風の「白鷺城回想の賦」の詩碑とともに姫路市文化振興財団が建立した。書は阿部良雄。

『城一田舎からの手紙一』より 阿部知二

空がいちめに赤々と燃えあがっていた時、疾風と轟音とがうず巻く真中に城は、その白い甍と壁とを火の色に染められながら、晝間にみるよりもげざやかに空にきらめきながら立っていたのだが、それは妖しい生命をもち妖しい美をも一つの怪鳥、生霊ともいふべき姿だった。阿部良雄書』

本多忠刻・お千連歌碑（姫路市本町 千姫の小径内）

表『初秋の 風を簾に まきとりて 軒にはおほふ 竹の葉の露 忠刻 お千』

裏『初秋の風を簾にまきとりて（忠刻）軒にはおほふ竹の葉の露（お千）』

この歌は千姫（1597～1666）が、徳川第二将軍秀忠から大安宅船（おおあとかぶね）を預けられたことを記念し、一家一族の繁栄を祝福するため、八月十四日の待宵を期して月見かたがた「船」の題で歌の会を催した時の連歌の一部で、千姫が姫路で残した唯一の歌といわれています。この歌碑は姫路中央ライオンズクラブが千姫小径の植栽記念に建立したものです。一九九二年 四月吉日』

播磨娘子万葉集歌碑（姫路市本町 日本城郭センター前歩道）

「万葉集」巻9・1776・1777「石川大夫 任を遷されて京に上る時に、播磨の娘子が贈る歌二首」の歌碑。

『絶等寸の 山の峰の上の 桜花 咲かむ春へは 君を思はむ
君なくは なぞ身装飾はむ 匣なる 黄楊の小櫛も 取らむとも思はず』

書は万葉集研究家文学博士中西進。漢文調で碑文は書かれている。

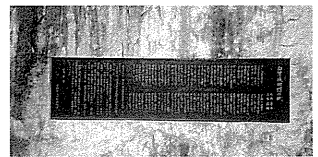
平成5年6月姫路東ロータリークラブが建立した。横に「歌碑に寄せて」の碑がある。



姫山公園内句碑



有本芳水・三木露風詩碑(表)



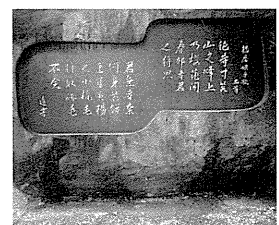
有本芳水・三木露風詩碑(裏)



阿部知二文学碑



本多忠刻・お千連歌碑



播磨娘子歌碑

播磨娘子文学碑「歌碑に寄せて」の碑

『今から千二百年ほど昔、姫路には播磨の国府があって国の役所が設けられ、この地近くは多くの役人や住民たちで、大変な賑わいをみせていた。役人は都からもやって来た。彼らは播磨の風光をめで、また美しい女性を愛した。しかし役人は任期がおわると都へ帰らなければならない。恋は、たまゆらに終る。そうした役人のひとりに石川大夫という者がいた。彼にも帰京の日が来た時、彼が愛した播磨娘子は、哀切をきわめた和歌を大夫に贈った。和歌は、深く人びとの心に残り、同じ境遇の女性たちに、長く歌いつがれたのであろう。「万葉集」にとどめられるところとなった。すなわち碑面の二首である。

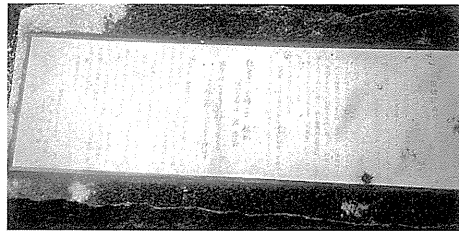
「万葉集」は日本最古の歌集で漢字をもって書かれているが、仮名まじり文に直すと次のようになる。

絶等寸の 山の峰の上の桜花 咲かむ春へは 君を思はむ

君なくは なぞ身装飾はむ 匣なる 黄楊の小櫛も 取らむとも思はず

それぞれ「絶等寸山の上に桜が咲く春には、あなたをしのぶことだろう」「あなたがいないなら化粧などしても仕方がない。大切にしている黄楊の小櫛も手に取りたくない」という意味である。絶等寸の山は姫路城がある姫山と考えられる。姫山には今日もなお、桜花が爛漫と咲きほこる。その花にむかってわれわれは古代人の愛の深さを心の奥にかみしめずにはいられない。この心を永く後世に伝えるために、姫路東ロータリークラブは創立二十周年を記念し、揮毫を文学博士中西進氏に依頼して、ここに万葉集歌碑一基を建立するものである。

平成五年六月吉日
姫路東ロータリークラブ
会長 松下貞雄
実行委員長 柴田榮三



「歌碑に寄せて」の碑

以上の他に姫路市本町護国神社境内に、昭和37年3月に詩歌吟詠道賀堂流門弟一同が建立した、賀堂流創設者磯部賀堂を讃えた『詩歌吟詠道 賀堂流碑』がある。

3 飾磨地域

有本芳水詩碑（姫路市飾磨区恵美酒 恵美酒天満神社前）

有本芳水先生叙勲長寿祝賀会を記念して昭和41年10月に建立された。碑文は

『播磨はわれの父の国
播磨はわれの母の国
飾磨の海にともる灯の
その色みれば涙ながるる』

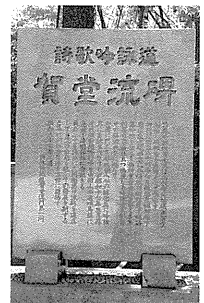
この詩は芳水の第3詩集「ふる郷」所収「播磨より」（9節の詩）の第2節

『播磨はわれの父の国
播磨はわれの母の国
秋風ふけば旅人は
松の名どころ数へつつ
遠き国よりたづね来ぬ』

の最初の二行と、第2詩集「旅人」所収「ふる里の海」（3節の詩）の第3節

『播磨はわれのふる里よ
飾磨の海にともる灯の
その色見れば涙ながるる』

の最後の二行を合わせたものである。建立の尽力者は郷土史家高橋秀吉である。



詩歌吟詠道 賀堂流碑



有本芳水詩碑

有本芳水生誕地碑（姫路市飾磨区玉地）

平成5年10月玉地自治会が建立した。

『飾磨の海近く有本芳水ここに生る』

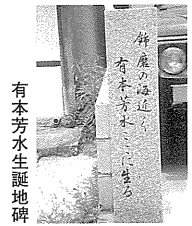
高橋秀吉歌碑（姫路市飾磨区須加 浜の宮天満宮境内）

碑には「読人しらづさく」となっているが、姫路市南畝町に在住し、雑誌「姫路文化」「明治の姫路百景」「大正の姫路」「姫路の五十年」「姫路の羅災」などを著した郷土史家としてまた有本芳水詩碑建設の尽力者としても著名であった高橋秀吉の歌碑。書は樋口尾山、昭和41年8月の建立。

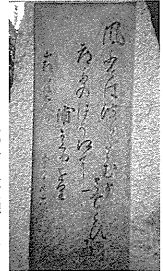
『いにしえは 松原つづく 浜辺にて 宮の燈明も 沖を照らしき
読人しらづさく』



高橋秀吉歌碑



有本芳水生誕地碑



山部赤人歌碑その1

山部赤人歌碑その1（姫路市飾磨区思案橋 思案橋西詰）

「万葉集」第3期（710～730年代）の歌人山部赤人の歌碑。「万葉集」巻6・945の歌。昭和18年6月深井晋水主宰の「播陽短歌会」が建立した。

『風ふけば 波がたたむと さもらひに 都多のほそ江に 浦かくりをり
山部宿弥赤人詠 文学博士尾上八郎書』



山部赤人歌碑その2

山部赤人歌碑その2（姫路市飾磨区構 今在家南第二公園内）

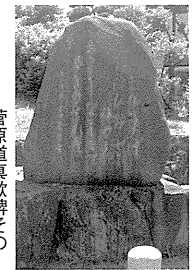
「万葉集」巻8・1424の歌、昭和60年12月に建立された。

『春の野に すみれ摘みにと 来し我そ 野をなつかしみ 一夜寝にける』

菅原道真歌碑その1（姫路市飾磨区思案橋 思案橋西詰）

醍醐天皇の時右大臣として国政を担当したが、藤原時平によって大宰権帥に左遷された菅原道真の歌碑。碑は「拾遺和歌集」巻16・雑春1006の歌、昭和46年2月25日思案橋改修を記念して建てられた。

『東風咲かば にほひおこせよ 梅の花 あるじなしとて 春なわすれそ
姫路市長 吉田豊信書』



菅原道真歌碑その1

菅原道真歌碑その2（姫路市飾磨区構 津田天満宮境内）

「新古今和歌集」巻18・雑下・1697の歌、昭和18年6月深井晋水主宰「播陽短歌会」が建立。

『海ならず たたへる水の底までも 清き心は 月ぞ照らさむ 菅公』

深井晋水（三二）歌碑（姫路市飾磨区構 津田天満宮境内）

姫路市新在家に在住し、「播陽短歌会」を主宰すると共に、飾磨小学校校長などを歴任した教育者でもあった深井晋水の歌碑。昭和33年5月に「播陽短歌会」が建立した。

『しづく水 たに水となり 川となり 河となりつつ 海に入るかも
喜寿叟晋水』



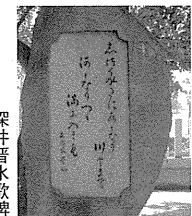
菅原道真歌碑その2

荒木良雄歌碑（姫路市飾磨区構 津田天満宮境内）

姫路市八代に在住した「宗祇」「心敬」「播磨の文学」などの著者荒木良雄の山部赤人讃歌の碑。昭和46年9月山部赤人神社奉賛会が建立した。曲は徳久孝

山部赤人讃歌 文学博士荒木良雄作詞 徳久孝作曲

『神さびて高く貴き富士のねを ふりさけみれば渡る日の 影も隠ろひ白雲も
行きはばかりと詠みあげし 歌のすがたのけだかさよ 山部赤人ほめたたへむ
春の野に菫摘みつつ一夜ねし 夢美しく和歌の浦 たづなき渡り象山の
こぬれの小鳥さやぎある 歌のしらべのすがしさよ 山部赤人ほめたたへむ
唐荷島めくる浪間の鶉の鳥に 吾家をおもひ風吹けば 波が立たむと浦隠る
津田の細江にのこしたる 歌のひびきのなつかしや 山部赤人ほめたたへむ』
(飾磨の残りから次回につづく)



深井晋水歌碑



山部赤人讃歌碑

編集 松岡秀樹（姫路市文化財嘱託調査員）